



enjoyed communicating with other students who belonged to different departments and realized that it is effective for understanding diversity. These results indicated that classwork is adequate to improve and foster students' understanding of the purpose of the class.

### Key words

School philosophy, first year experience program, Introduction to hospitality, Collaborative work between faculty and academic staff

### 要 旨

本研究は、2017年度から始まった本学の初年次教育を定着させるとともに、新入生が大学での教育を理解し、建学の精神に代表される理念やディプロマポリシーを自分のものとして捉え、その実現に向けた主体的な学修の基盤を構築するという初年次教育の目標の達成を図ることにある。このためには、彼らの特性をとらえるとともに、彼らが初年次教育をどのように捉え、理解したかを把握しなければならない。

そこで初年次教育の科目の一つとして開設された「ホスピタリティ概論」を活用して、全受講生を対象とした2つの調査を3年間実施した。1つ目の調査は入学当初の学生像をとらえ授業展開に生かすために学生の特徴を把握するものであり、第1回目の授業で実施された。2つ目の調査は授業内容の理解度を評価するものであり、第10回目に実施された。これらの回答を年度と学科毎に集計、分析した。その結果、次のことが明らかになった。

- ①オープンキャンパスへの参加や進学希望状況などの本学入学に至る経緯が学科によって異なること、そして、入学当初には心身に不安を抱いている学生が、どの学科にも相当数存在すること。3年間の調査によって各学科の学生の特色が明らかになり、学科毎の適切な学修支援方策の作成に向けた示唆が得られたこと。
- ②この講義を受けて、建学の精神であるホスピタリティの獲得に大学が力を入れており、その実現が求められていると多くの学生が認識していること、及び、本科目の重点目標である多様性の理解力の育成につながる他学科の学生とのコミュニケーションの機会に意義を見出していること等から、授業の目標達成に向けた順調な歩みが見られること。

これらの結果及び他の科目の報告から、初年次教育が定着しつつあること、そして、その目標達成に向けた歩みが順調であると判断した。ただ、更なる充実のための課題も浮かび上がっている。

### キーワード

建学の精神、初年次教育、ホスピタリティ概論、教職協働

## 1. はじめに

大学教育改革は、教育の改善から教育の質保証へと重心を移しつつある。それは、2018年11月に行われた中央教育審議会の「2040年に向けた高等教育のグランドデザイン」答申<sup>1)</sup>にも謳われている。ここでは、2040年に必要とされる人材像を明確にするとともにその実現に向けて、学修者本位の教育への転換と学びの質保証の再構築が強調されている。つまり、「何をどのように教えたか」から「どのように学び、何を身に付けることができたのか」への転換が求められているのである。さらに、三つの方針（ディプロマポリシー、カリキュラムポリシー、アドミッションポリシー）に基づく体系的で組織的な大学教育の展開とアセスメントポリシーによる点検・評価、並びに、教学 IR による教育活動の見直しを行う

PDCA サイクルの確立を含む教学マネジメントを行わなければならないとしている。

長崎国際大学は、2016年度に3ポリシーを制定し、2017年度から実施している。これに沿って前報でも述べたように<sup>2)</sup>、ホスピタリティ概論、教養セミナーA、茶道文化IAの3科目を初年次教育として位置づけ、全1年生の必修科目として開講している。初年次教育を3科目で構成したのは、サウスカロライナ大学でのフレッシュマン・セミナー（university 101）で掲げられた目標<sup>3)</sup>に加えて、ディプロマポリシーの中核をなす建学の精神の理解とその獲得を円滑に進めるとともに、本学における主体的な学びの基盤形成をより強固に構築させたいと考えたからである。

この初年次教育の目標を達成するために、教養セ

ミナーAとホスピタリティ概論では、受講生を対象とした授業の印象や意見等を収集する調査を行い、改善に向けた提案と実践を行ってきている<sup>4)~6)</sup>。特に、ホスピタリティ概論は建学の精神の理解等に直結するという観点から、授業中に2回の調査を行って、その回答結果を分析し、初年次教育の目標達成の状況を把握しようと努めてきた。

2018年度には2017年度の実践の分析報告<sup>2)</sup>を受けて、学生の活動の活性化を図るために16名のSAを配置するとともに、積極的に学生と関わりたいという事務職員に限ってのファシリテータへの登用を行った。

2019年度はその方針を受け継ぐとともに、学生がより新鮮に講義を受けることが可能になるように、大学執行部担当の順番を変更するなど授業の充実を図った。そして、3回目となるクリッカーと質問紙による二つの調査を実施した。

クリッカーによる調査は、回答結果が即座にスクリーンに示される。著者の経験によれば、質問毎の結果を共有することによって、学生に一種の安心感が生まれるのか、全体の雰囲気や和み、彼らは素直な回答を寄せるようになる。また、教員やファシリテータにとっては、次々に示されるデータを、つなぎ合わせることによって、その場で入学直後の1年生の実像を把握することが可能になり、今後の学修支援方法のヒントを得ることができる。前報までは、質問の回答に対する各学科の違いを分析してきたが、本稿ではそれに加えて、3年間の各質問項目に対する各学科の回答比率に違いが生じているかについても分析を行った。本報告では、研究目標を論じる際に必要な質問項目を取り上げ、各学科の回答結果を示すが、誌面の都合もあり4学科の中で特に対照的な2つの学科（A学科とD学科）に焦点を当て、論じることにする。

質問紙調査については、いわゆる学生による授業評価アンケートとは異なり、ホスピタリティとは何か、また、それに関する授業内容のみならず、授業形態のほかオムニバスで展開される各授業の講師の適切さなどを細かく尋ね、授業全体を通じての学生の理解度を尋ねるものであった。この結果についても研究目標を論じる際に必要な質問項目を取り上げ、

各学科の回答結果を示す。授業の目標や内容については、参考資料1を参照していただきたい。

15回の授業終了後、2017年度～2019年度の調査をもとに、3年間の回答を集計、分析し、考察を加えた。その結果を報告する。

## 2. 調査方法

3年間を通して調査方法と調査内容はほぼ同じである。講師の変更等によって、質問内容を若干変更したことがあるが、その項目については分析対象から外した。調査方法は次の通りである。

### 調査対象者

2017年度～2019年度の全受講者

### 調査方法

#### 1) クリッカーによる調査

この調査は毎年第1回目の授業中に実施している。ここでは、オープンキャンパスへの参加や本学への進学状況、そして、オリエンテーションの理解度や心身の不安等を聞くための29項目を用意<sup>\*1)</sup>した。

#### 2) 質問紙による調査

この調査は、毎年第10回目の授業中に実施している。ここでは、ホスピタリティの理解度や授業内容についての印象、及び授業に対する意見等を聞くための25項目を用意<sup>\*2)</sup>した。

※1：参考資料2参照、※2：参考資料3参照

### 分析方法

クリッカーによる調査結果については、SPSS Ver.22を用いて $\chi^2$ 検定を行ったが、5未満の期待値が全体の20%以上あった場合には、R Ver.3.6.1によってフィッシャーの直接法による検定を行った。質問紙調査の5段階評定の質問項目については、各項目の回答に対して、1～5（全くそう思わない：1、そう思わない：2、どちらとも言えない：3、そう思う：4、非常にそう思う：5）の数値を与え、SPSS Ver.22を用いて開講年度×学科の2要因の分散分析を実施した。ただし、等分散性の検定の結果が有意であった場合には、クラスカル・ウォリス検定により学科ごとに年度間の比較を行った。

### 3. 調査結果

#### 1) クリッカーによる調査

全受講者の中で、分析対象となった項目に全て正しく回答していた者を分析対象者とした。各年度における分析対象者数は表1の通りである。

表1 クリッカー調査結果の分析対象者数 (人)

学科	2017年度	2018年度	2019年度
A	155	109	122
B	51	31	33
C	78	52	39
D	95	69	57

#### ① 入学者の出身県

図1～4にA学科～D学科別の出身県を示した。図中の1～9は、1.長崎県内、2.佐賀県、3.福岡県、4.大分県 5.熊本県、6.宮崎県、7.鹿児島県または沖縄県、8.九州外の都道府県、9.海外を示す。

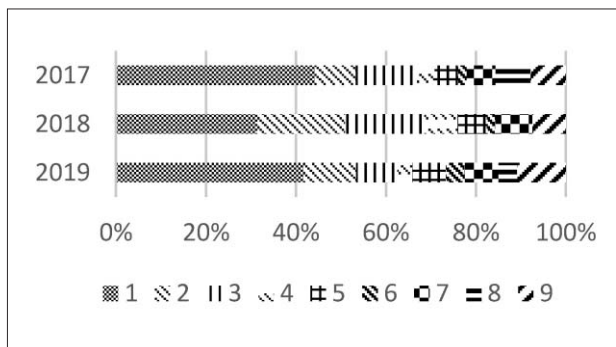


図1 A学科の入学者の出身県

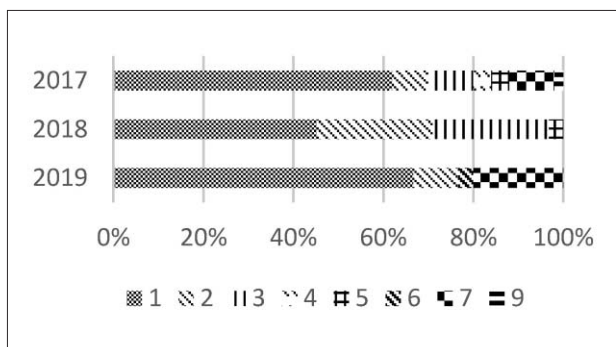


図2 B学科の入学者の出身県

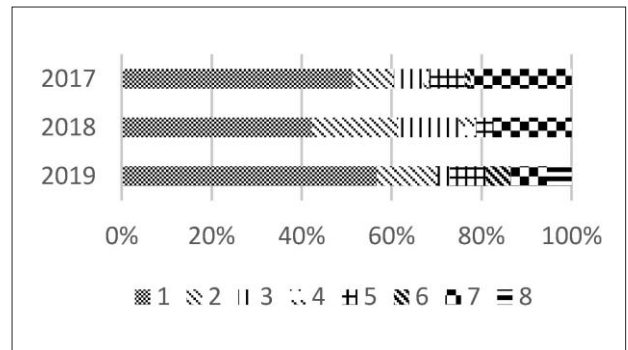


図3 C学科の入学者の出身県

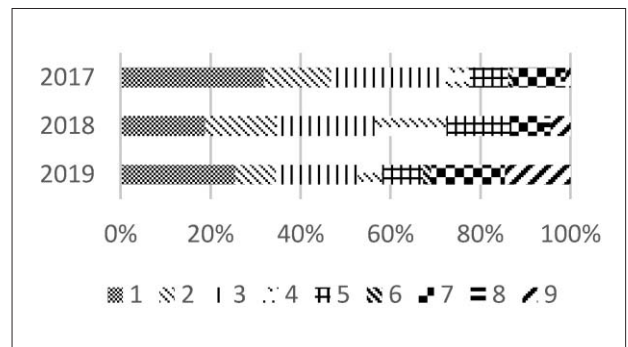


図4 D学科の入学者の出身県

ここに示されているように、長崎県出身者が半数以上を占めている学科もあれば、30%程度の学科もあり、3年間その傾向に大きな変化は見られない。共通して言えることは、九州北部（長崎県、佐賀県、福岡県）の出身者が半数以上を占めること、また、約80%が九州管内出身者であることである。

#### ② オープンキャンパスへの参加

オープンキャンパスへの参加は、進学候補大学への一歩であり、入学前からの本学への興味・関心度を示すものでもある。各学科の回答結果を表2～5に示した。

A学科については、年度ごとの回答の比率には統計的に有意な違いが示された ( $\chi^2(6, N=386) = 40.50, p < .05$ )。残差分析の結果、複数回参加したとする割合が2018年度で高く、2017年度では低いこと、1回参加したとする割合は2017年度で高く、2018年度で低いこと、自分ではなく家族が参加したとする割合が2018年度では高く、2019年度では低いことが示された ( $p < .05$ )。

B学科について、フィッシャーの直接法による検

定を行ったところ、有意な違いが示された ( $p<.05$ )。これについて、各選択肢に対する年度間の違いを比較するため、各選択肢に対する選択数とそれ以外の選択数に対する選択数に分割した。Holm 法によって  $p$  値を調整したフィッシャーの直接法による検定を行った結果、2018年度は1回参加したと回答した割合が2017年度や2019年度に比して有意に低いことが示された。

表2 A学科の回答結果

年度	複数	1回	家族	0回	計
2017	17	72	4	62	155
2018	34	25	12	38	109
2019	23	43	1	55	122
計	74	140	17	155	386

表3 B学科の回答結果

年度	複数	1回	家族	0回	計
2017	10	29	0	12	51
2018	15	5	5	6	31
2019	6	18	0	9	33
計	31	52	5	27	115

C学科について、フィッシャーの直接法による検定を行ったところ、有意な違いが示された ( $p<.05$ )。これについて、各選択肢に対する年度間の違いを比較するため、各選択肢に対する選択数とそれ以外の選択数に対する選択数に分割した。Holm 法によって  $p$  値を調整し、フィッシャーの検定を行った結果、2018年度は家族が参加した割合が2017年度に比して有意に高いことが示された。

D学科においても年度ごとの回答の比率には統計的に有意な違いが示された ( $\chi^2(6, N=221)=55.26, p<.05$ )。残差分析の結果、複数回参加したとする割合が2018年度で高く、2017年度では低いこと、自分ではなく家族が参加したとする割合が2018年度では高く、2017年度と2019年度では低いこと、参加しなかったとする割合が2017年度と2019年度では高く、2018年度では低いことが示された。

表4 C学科の回答結果

年度	複数	1回	家族	0回	計
2017	17	31	1	29	78
2018	16	15	9	12	52
2019	7	17	0	15	39
計	40	63	10	56	169

表5 D学科の回答結果

年度	複数	1回	家族	0回	計
2017	12	24	0	59	95
2018	12	20	16	21	69
2019	0	20	0	37	57
計	24	64	16	117	221

このように、全学科ともに年度によって参加の割合や家族の参加の割合などの違いが見られ、学科の特色を読み取ることができる。この中で、A学科とD学科には大きな違いが見られ、入学者の半数以上が本学のオープンキャンパスに参加したと回答しているA学科に対して、D学科においてはオープンキャンパス参加者が約40%に過ぎず、調査を行った3年の間で、その傾向に変化は見られない。

### ③本学への進学希望

本学を進学先の第一に挙げて入学する場合とそうでない場合では、入学時の高揚感に差が生じることが考えられる。本学の志望順位を尋ねた結果を表6～9に示した。

A学科については、年度ごとの回答の比率には有意な違いは示されなかった ( $\chi^2(8, N=386)=10.84, p>.05$ )。また、B学科とC学科について、それぞれフィッシャーの検定を行ったところ、有意な違いは示されなかった ( $p>.05$ )。

表6 A学科の回答結果

年度	第一希望	第二希望	第三希望	希望していない	希望大学なし	計
2017	89	30	10	16	10	155
2018	47	25	9	20	8	109
2019	59	20	15	16	12	122
計	195	75	34	52	30	386

表7 B学科の回答結果

年度	第一希望	第二希望	第三希望	希望していない	希望大学なし	計
2017	37	3	3	4	4	51
2018	18	8	1	3	1	31
2019	21	3	1	3	5	33
計	76	14	5	10	10	115

表8 C学科の回答結果

年度	第一希望	第二希望	第三希望	希望していない	希望大学なし	計
2017	50	15	3	8	2	78
2018	27	15	4	4	2	52
2019	23	10	3	2	1	39
計	100	40	10	14	5	169

D学科について、フィッシャーの検定を行ったところ、有意な違いが示された ( $p < .05$ )。これについて、各選択肢に対する年度間の違いを比較するため、各選択肢に対する選択数とそれ以外の選択数に対する選択数に分割した。Holm法によって  $p$  値を調整し、フィッシャーの検定を行った結果、いずれにおいても有意差は示されなかった ( $p > .05$ )。

表9 D学科の回答結果

年度	第一希望	第二希望	第三希望	希望していない	希望大学なし	計
2017	33	31	14	13	4	95
2018	14	14	20	19	2	69
2019	14	8	17	14	4	57
計	61	53	51	46	10	221

以上のように、全学科において3年間の回答の比率には違いが見られなかった。しかし、調査を行った3年間を見ると、A学科においては、第一希望と第二希望の入学者が60%を超えるのに対して、D学科では、2017年度を除くと第一希望と第二希望の入学者が約40%にすぎないことがわかる。

#### ④学科オリエンテーションでの理解度

入学直後のオリエンテーションは、新入生が大学生活をイメージする上で最も大切なものの一つである。その理解状況を聞いた結果は表10~13の通りである。

A学科においては、年度ごとの回答の比率には統計的に有意な違いが示された ( $\chi^2(8, N=386) = 22.03, p < .05$ )。残差分析の結果、非常に分かったとする割合が2017年度では高く、2019年度では低いこと、全く分からなかったとする割合が2017年度では低く、2018年度では高いことが示された ( $p < .05$ )。B学科、C学科、D学科それぞれについてフィッシャーの検定を行ったところ、有意な違いは示されなかった ( $p > .05$ )。

A学科以外の学科では有意な差は見られなかった。しかしながら、「分からなかった」と「全く分からなかった」と回答した割合を見てみると、D学科においては、全年度において3%~7%と非常に少なかったが、A学科においては10%~20%の学生が分からないと答えていることがわかる。

表10 A学科の回答結果

年度	非常によくわかった	よくわかった	どちらともいえない	分からなかった	全く分からなかった	計
2017	21	61	54	15	4	155
2018	10	30	42	14	13	109
2019	4	42	56	11	9	122
計	35	133	152	40	26	386

表11 B学科の回答結果

年度	非常によくわかった	よくわかった	どちらともいえない	分からなかった	全く分からなかった	計
2017	7	27	10	5	2	51
2018	5	19	7	0	0	31
2019	7	12	12	0	2	33
計	19	58	29	5	4	115

表12 C学科の回答結果

年度	非常によくわかった	よくわかった	どちらともいえない	分からなかった	全く分からなかった	計
2017	9	42	26	1	0	78
2018	2	29	19	1	1	52
2019	3	26	9	1	0	39
計	14	97	54	3	1	169

表13 D学科の回答結果

年度	非常によくわかった	よくわかった	どちらともいえない	分からなかった	全く分からなかった	計
2017	12	52	28	2	1	95
2018	1	38	27	2	1	69
2019	7	27	19	3	1	57
計	20	117	74	7	3	221

⑤精神的な不安

大学への入学は夢への一步ではあるが、今までの生活とは大きく異なるために心身の不安も大きいと考えられる。精神的な不安に対する回答結果を表14～17に示した。

A学科では、年度ごとの回答の比率には有意な違いは示されなかった ( $\chi^2(8, N=386)=11.65, p>.05$ )。また、B学科、C学科それぞれについて、フィッシャーの検定を行ったところ、有意な違いは示されなかった ( $p>.05$ )。D学科では、年度ごとの回答の比率には有意な違いは示されなかった ( $\chi^2(8, N=221)=12.11, p>.05$ )。

全学科において年度ごとに有意な違いは示されなかったが、しかしながら、「少し不安」と「非常に不安」と答えた学生の割合は、毎年、A学科で10%～30%存在し、D学科においては30%～50%存在することが明らかになった。

表14 A学科の回答結果

年度	全く不安なし	不安なし	どちらともいえない	少し不安	非常に不安	計
2017	60	36	33	18	8	155
2018	35	18	22	23	11	109
2019	41	23	21	29	8	122
計	136	77	76	70	27	386

表15 B学科の回答結果

年度	全く不安なし	不安なし	どちらともいえない	少し不安	非常に不安	計
2017	26	8	9	3	5	51
2018	13	6	5	5	2	31
2019	9	6	6	9	3	33
計	48	20	20	17	10	115

表16 C学科の回答結果

年度	全く不安なし	不安なし	どちらとも言えない	少し不安	非常に不安	計
2017	14	18	25	19	2	78
2018	12	12	18	8	2	52
2019	6	7	10	13	3	39
計	32	37	53	40	7	169

表17 D学科の回答結果

年度	全く不安なし	不安なし	どちらとも言えない	少し不安	非常に不安	計
2017	24	20	23	25	3	95
2018	10	13	13	25	8	69
2019	7	10	11	24	5	57
計	41	43	47	74	16	221

2) 質問紙による調査

本調査においても、分析対象とした各項目にもれなく答えている者を分析調査対象者とした。各年度における分析対象者数は表18の通りである。

表18 アンケート調査結果の分析対象者数 (人)

学科	2017年度	2018年度	2019年度
A	183	201	203
B	63	48	65
C	83	81	69
D	116	95	119

①理事長や学長の講義で、本学がホスピタリティの育成を重視している理由が分かった。

表19に各年度の各学科の平均評定値を示した。

表19 各年度の各学科の平均評定値

学科	2017年度	2018年度	2019年度
A	4.08	3.97	4.20
B	3.92	3.96	4.22
C	3.93	4.22	4.30
D	4.25	4.23	4.42

開講年度の主効果は有意であり ( $F(2, 1313) = 8.80, p < .05$ )、これについて Turkey の HSD 検定を行った結果、2019年度が2017年度や2018年度より平均評定値が高いことが明らかになった ( $p < .05$ )。また、学科の主効果が有意であった ( $F(3, 1313) = 6.17, p < .05$ )。これについて Turkey の HSD 検定を行った結果D学科の平均評定値は、他の3学科のそれよりも有意に高いことが明らかになった ( $p < .05$ )。また、開講年度と学科の交互作用は有意ではなかった ( $F(6, 1313) = 1.30, p > .05$ )。このことから、どの学科においても、年度を追うごとにホスピタリティ育成を重視しているとの認識が増大しており、D学科の認識度はほかの3学科より高いことがわかる。

②ホスピタリティの起源と文化の講義は、興味深く聞くことができた。

表20に各年度の各学科の平均評定値を示した。

表20 各年度の各学科の平均評定値

学科	2017年度	2018年度	2019年度
A	3.84	3.59	3.82
B	3.68	3.73	3.71
C	3.39	3.77	3.97
D	3.94	3.78	3.93

開講年度の主効果は有意であり ( $F(2, 1313) = 3.09, p < .05$ )、これについて Turkey の HSD 検定を行った結果、2019年度が2018年度より平均評定値が高いことが明らかになった ( $p < .05$ )。学科の主効果は有意ではなかった ( $F(3, 1313) = 2.44, p > .05$ )。また、開講年度と学科の交互作用は有意であった ( $F(6, 1313) = 3.26, p < .05$ )。これについて開講年度別の学科の単純主効果の検定を行った結果、2017年度においてC学科の平均評定値はA学科とD学科のそれよりも



有意に低いことが示された ( $p < .05$ )。学科別の開講年度の単純主効果検定の結果では、A学科において2017年度や2019年度の平均評定値は2018年度に比べて高く、C学科においては2018年度や2019年度の平均評定値が2017年度に比べて有意に高いことが示された ( $p < .05$ )。

このことより、年度を追って興味深く聞いている学生が多くなっていること、A学科とC学科では年度の違いがあるものの、3年目の今年度においてその傾向が強くなっていることが分かる。

③ホスピタリティの起源と文化の講義で、その歴史や意味が分かった。

表21に各年度の各学科の平均評定値を示した。

表21 各年度の各学科の平均評定値

学科	2017年度	2018年度	2019年度
A	3.84	3.64	3.91
B	3.70	3.85	4.02
C	3.66	3.96	4.09
D	4.08	3.94	4.19

等分散性の検定の結果が有意であったため、クラスカル・ウォリス検定により学科ごとに年度間の比較を行った。その結果、A学科とC学科で有意な違いが示された。Dunn 検定による多重比較を行うと、A学科では2019年度の評定値は2018年度に比べて有意に高いことが、C学科では2018年度と2019年度の平均評定値が2017年度に比して有意に高いことが示された ( $p < .05$ )。

以上のことから、A学科とC学科では、2019年度にはホスピタリティの起源や歴史、そしてその意味を理解したとの受講生が多くなっていることがわかる。

④プレゼンテーションの講義で、その意義や方法が分かった。

表22に各年度の各学科の平均評定値を示した。

表22 各年度の各学科の平均評定値

学科	2017年度	2018年度	2019年度
A	4.03	3.86	3.96
B	3.98	3.85	4.08
C	4.04	4.17	4.32
D	4.20	4.17	4.23

開講年度の主効果は有意ではなかったが ( $F(2, 1313) = 2.16, p > .05$ )、学科の主効果は有意であった ( $F(3, 1313) = 8.05, p < .05$ )。学科の主効果について Turkey の HSD 検定を行った結果、D科の平均評定値はA学科やB学科のそれよりも高く、C学科の平均評定値は、A学科のそれよりも有意に高いことが示された ( $p < .05$ )。また、開講年度と学科の交互作用は有意ではなかった ( $F(6, 1313) = 1.07, p > .05$ )。

このことから、学科によってプレゼンテーションについての講義内容への理解が異なり、D学科とC学科で高く、A学科で最も低いことが示された。

⑤オープンキャンパスへの提案のような具体的な活動ができる授業は、有意義である。

表23に各年度の各学科の平均評定値を示した。

等分散性の検定の結果が有意であったため、クラスカル・ウォリス検定により学科毎に年度間の比較を行った。その結果、A学科、C学科、D学科で有意な違いが示された。Dunn 検定による多重比較を行うと、A学科では2019年度の評定値が2017年度に比して有意に高いことが、C学科では2018年度や2019年度の評定値が2017年度に比べて有意に高いことが、D学科では2019年度の評定値が2018年度に比して有意に高いことが示された ( $p < .05$ )。

B学科以外の3学科において2019年度の評定値が高くなっていることから、オープンキャンパスへの提案を考える授業の意義を認める肯定的な意見が広がってきたと判断する事ができる。

表23 各年度の各学科の平均評定値

学科	2017年度	2018年度	2019年度
A	3.85	3.74	3.99
B	3.97	3.85	3.94
C	3.54	4.01	3.99
D	3.95	3.77	4.03

⑥教員や事務の方々による仕事でのホスピタリティの話は、興味深く聞くことができた。

表24に各年度の各学科の平均評定値を示した。

表24 各年度の各学科の平均評定値

学科	2017年度	2018年度	2019年度
A	3.93	3.77	4.08
B	3.89	3.88	4.15
C	3.68	4.07	4.30
D	4.08	3.79	4.26

開講年度の主効果が有意であり ( $F(2, 1313) = 15.28, p < .05$ )、Turkey の HSD 検定を行った結果、2019年度の平均評定値は2017年度や2018年度よりも有意に高いことが示された。学科の主効果は有意ではなかった ( $F(3, 1313) = 1.37, p > .05$ )。また、開講年度と学科の交互作用は有意であった ( $F(6, 1313) = 2.87, p < .05$ )。これについて開講年度別の学科の単純主効果の検定を行った結果、2017年度においてD学科の平均評定値はC学科のそれよりも有意に高いことが示された ( $p < .05$ )。学科別の開講年度の単純主効果検定の結果では、A学科において2019年度の平均評定値が2018年度より、C学科において2018年度および2019年度の平均評定値が2017年度より、D学科においては2019年度の平均評定値が2018年度よりも有意に高いことが示された ( $p < .05$ )。

B学科以外の3学科において2019年度の評定値が高くなっていることから、教職協働の一環としての教員及び事務職員が自らのキャリアを紹介することは意義があると肯定的に受け取られるようになってきていることがわかる。

⑦教員や事務の方々による仕事でのホスピタリティの話は役に立った。

表25に各年度の各学科の平均評定値を示した。

表25 各年度の各学科の平均評定値

学科	2017年度	2018年度	2019年度
A	3.92	3.76	4.08
B	3.83	3.96	3.89
C	3.73	4.10	4.19
D	3.87	3.69	4.18

開講年度の主効果が有意であり ( $F(2, 1313) = 8.25, p < .05$ )、Turkey の HSD 検定を行った結果、2019年度の平均評定値は2017年度や2018年度よりも有意に高いことが示された ( $p < .05$ )。学科の主効果は有意ではなかった ( $F(3, 1313) = 0.75, p > .05$ )。また、開講年度と学科の交互作用は有意であった ( $F(6, 1313) = 2.90, p < .05$ )。これについて開講年度別の学科の単純主効果の検定を行った結果、2018年度ではC学科の平均評定値がA学科とD学科のそれよりも有意に高いことが示された ( $p < .05$ )。学科別の開講年度の単純主効果検定の結果では、A学科において2019年度の平均評定値が2018年度よりも、C学科では2018年度と2019年度の平均評定値が2017年度よりも、D科では2019年度の平均評定値が2018年度や2019年度のそれよりも有意に高いことが示された ( $p < .05$ )。

この回答においても、B学科以外の3学科において2019年度の評定値が高くなっていることから、教員や事務の方々の話がホスピタリティの獲得等に役立つとの認識が年度を追って深まっていることが示された。

⑧ホスピタリティの自己診断は、役に立つと思う。

表26に各年度の各学科の平均評定値を示した。

表26 各年度の各学科の平均評定値

学科	2017年度	2018年度	2019年度
A	3.74	3.59	3.75
B	3.70	3.77	3.80
C	3.34	3.85	3.90
D	3.74	3.59	3.75

開講年度の主効果は有意であり ( $F(2, 1313) = 5.58,$

$p < .05$ ), Turkey の HSD 検定を行った結果、2019年度の平均評定値は2017年度や2018年度のそれより有意に高いことが明らかになった ( $p < .05$ )。学科の主効果は有意ではなかった ( $F(3, 1313) = .29, p > .05$ )。

また、開講年度と学科の交互作用は有意であった ( $F(6, 1313) = 2.71, p < .05$ )。これについて開講年度別の学科の単純主効果の検定を行った結果、2017年度においてA学科の平均評定値は、C学科のそれよりも有意に高いことが示された ( $p < .05$ )。学科別の開講年度の単純主効果検定の結果では、C学科において2018年度や2019年度の平均評定値は2017年度のそれよりも有意に高いことが示された ( $p < .05$ )。

この結果に示されているように、自己診断の有効性は年とともに高く認識されるようになってきている。また、その傾向はC学科においてより顕著に示されていると言える。

⑨この授業で、他学科の人とおしゃべりする機会を持つ事ができた。

表27に各年度の各学科の平均評定値を示した。

表27 各年度の各学科の平均評定値

学科	2017年度	2018年度	2019年度
A	3.75	3.69	3.82
B	3.57	3.69	3.94
C	3.16	4.01	3.80
D	3.44	3.73	3.55

等分散性の検定の結果が有意であったため、クラスカル・ウォリス検定により学科ごとに年度間の比較を行った。その結果、C学科で有意な違いが示され、Dunn 検定による多重比較を行うと、2018年度と2019年度の評定値が2017年度に比して有意に高いことが示された ( $p < .05$ )。

このように、C学科のみが検定での違いが認められた。しかしながら、有意な差は認められなかったものの、A学科とB学科においても平均評定値が2019年度において高くなっている。

⑩この授業で他学科の人の意見を聞くことができ、有意義だった。

表28に各年度の各学科の平均評定値を示した。

表28 各年度の各学科の平均評定値

学科	2017年度	2018年度	2019年度
A	3.84	3.67	3.85
B	3.54	3.88	3.86
C	3.41	3.98	3.86
D	3.59	3.81	3.61

等分散性の検定の結果が有意であったため、クラスカル・ウォリス検定により学科ごとに年度間の比較を行った。その結果、C学科において有意な違いが示され、Dunn 検定による多重比較を行うと、2018年度と2019年度の評定値が2017年度に比して有意に高いことが示された ( $p < .05$ )。

C学科のみで2019年度の評定値が2017年度に比べて高いとされた。しかしながら、有意な差は認められなかったものの他の学科においても2019年度の平均評定値が2017年度に比べて高くなっている。

⑪自分としては、この授業に積極的に参加した。

表29に各年度の各学科の平均評定値を示した。

表29 各年度の各学科の平均評定値

学科	2017年度	2018年度	2019年度
A	3.73	3.73	3.85
B	3.62	3.67	3.91
C	3.60	4.01	3.83
D	3.89	3.98	4.02

等分散性の検定の結果が有意であったため、クラスカル・ウォリス検定により学科ごとに年度間の比較を行った。その結果、C学科において有意な違いが示された。Dunn 検定による多重比較を行うと、C学科では2018年度の評定値が2017年度よりも有意に高いことが示された ( $p < .05$ )。

この回答においても、有意差が認められたのはC学科のみであった。しかしながら、有意な差は認められなかったものの各学科ともに2019年度の平均評定値が2017年度よりも高くなっている。

⑫ホスピタリティを理解する上で、この授業は今までのところ合格点を与えることができる。

表30に各年度の各学科の平均評定値を示した。

表30 各年度の各学科の平均評定値

学科	2017年度	2018年度	2019年度
A	3.87	3.69	3.88
B	3.60	3.71	3.92
C	3.45	3.90	4.00
D	3.80	4.01	4.10

等分散性の検定の結果が有意であったため、クラスカル・ウォリス検定により学科ごとに年度間の比較を行った。その結果、A学科において有意な違いが示され、Dunn 検定による多重比較を行うと、2019年度の平均評定値が2018年度よりも高いことが示された ( $p < .05$ )。C学科においても有意な違いが示され、Dunn 検定による多重比較を行うと、2018年度や2019年度の評定値が2017年度のそれよりも有意に高いことが示された ( $p < .05$ )。また、D科においても有意な違いが示され、Dunn 検定による多重比較を行うと、2019年度の評定値が2017年度よりも有意に高いことが示された ( $p < .05$ )。

このようにB学科以外の3学科において、この授業に合格点を与えることができるとの認識が高まっている。

#### 4. 考察

本研究では、本学の初年次教育の中の1科目であるホスピタリティ概論での3年間にわたる2つの調査結果をまとめ、分析した。

まず、入学の早い時期に入学生像を把握し、学修支援に活用したいとの想いを込めて行ってきたクリッカーによる調査では大きく3つのことが明らかになった。第一に、本学への進学に関して、各学科で入学に至る経緯が異なる傾向があること、第二に学科によって入学直後のオリエンテーションでの理解度に差が見られること、第三に学科で占める割合は異なるものの、どの学科においても心身への不安を抱えている学生が一定数存在することである。

特に回答傾向が特徴的だったA学科とD学科を例

に挙げて説明すると、半数以上が本学のオープンキャンパスに参加し、第一希望で本学に進学しているのがA学科である。しかし、10%~20%の学生が入学当初のオリエンテーションを理解できず、入学後も10%~30%の学生が精神的な不安を抱えている。一方、入学生の60%がオープンキャンパスに参加せず、第一希望での本学への入学者が30%にとどまっているD学科では、オリエンテーションの理解度は高いものの、A学科よりも高い割合の学生が精神的な不安を抱えている状況にある。

このように、3年間継続して調査することによって、各学科の特色が浮かび上がってきた。これを、入学当初に全教職員が共有することによって、オリエンテーションの形態を改善するなど各学科に応じた学修支援策を検討し丁寧に実施すれば、大学と学生の距離はぐんと短くなる。それが、学生の主体的な学修への意欲を向上させるという好循環を生じさせる可能性に繋がる。

2つ目の調査は授業内容の理解度を評価するものであり、第10回目に実施された。

このホスピタリティ概論を通して、初年次教育の定着や目標の達成を図りたいと考え、2017年度から3年間にわたり、調査と改善を積み重ねてきた<sup>2), 6)</sup>。この試みについての回答は、10回目の授業で行う質問紙法による調査結果が示している。

初年次教育では、大学の理念や建学の精神をいかに大切にし、その獲得を求めているかを、学生たちに明確に伝えることから始まる。これに関しては、大学がホスピタリティを大切にしていることの認識やホスピタリティの歴史やその意味の理解に対する肯定的な回答が2017年度よりも2019年度の方が多くなっている。また、ホスピタリティの自己分析についても有用であるという回答が年々多くなっている。授業内容の理解と共に、自己のホスピタリティの向上を図らなければならないという意識につながると期待することができる。

また、ホスピタリティの獲得には欠かせない多様性を理解する力に関しては、「他学科の人とおしゃべりする機会を持てた」や、「他学科の人の意見が聞け、有意義だった」という質問項目については肯定的な回答が多くなっており、その力を培う基盤の

形成に貢献していることも示している。

さらに、進学した大学をいかに後輩に伝えるかを考えるオープンキャンパスへの提言という授業に関しても価値ある内容であるという肯定的な回答が多くなっている。

加えて、全学挙げて建学の精神を伝える工夫の一つとして、教職協働体制でホスピタリティ概論を実践しているが、その工夫を肯定的に捉えている受講生も多くなっている。また、ホスピタリティ概論の受講に真面目に取り組んでいると自覚している受講生も多いといえる。

そして、ホスピタリティを理解する上でホスピタリティ概論に合格点を与えることができるかという問いに対して、多くの学科では、2019年度の肯定的な回答がその他の年度よりも多くなっている。

一方、別の初年次教育科目である教養セミナーAに関しては、乙須らが、本研究と同じように調査を繰り返して改善点を見つけ、授業改善に取り入れている<sup>4)-5)</sup>。その結果、4学科の担当教員からは授業展開が行いやすくなったとの意見が聞こえてきている。また、茶道文化Aに関しては教職協働の体制の整備や障害を持つ学生への対応改善など授業の充実が図られている。これらの初年次教育の授業に対して、学生たちも積極的に参加するようになってきていると感じている。

以上のように、ホスピタリティ概論、教養セミナーA及び茶道文化IAの着実な実践と調査によるデータ分析から、当初に掲げた研究の目標の達成については、目標達成に向けて着実に歩んでいると判断していいのではなかろうか。ただ、他学科の人との交流の意義をもっと多くの受講生に認識して欲しいとの思いもある。この実現に向けて努力したいと考えている。また、班の人数が多いということは、開設当初から指摘されていたことである。1年生全員が

受講する授業の時間割上の枠は、余裕がないのが現状であり、なかなか工夫の余地がないのも事実である。人数が気にならないような授業内での活動や支援策を今後検討したいと考えている。

## 5. おわりに

開設から3年間の実践を行い、その中で調査を行ってきた結果、当初の目標は達成できそうであるが、創設時のメンバーが残っていることが、その原動力になっているとも考えられる。今後、授業の質を落とさず継続していける体制を組み立て、着実な進化を図ろうと考えている。

本研究は、人間社会学部の研究倫理委員会の承諾を得て実施している。

### 参考・引用文献

- 1) 中央教育審議会答申 「2040年に向けた高等教育のグランドデザイン (答申)」
- 2) 藤原俊幸他 (2017): 教職協働で行う初年次教育—ホスピタリティ概論の実践と課題—, 長崎国際大学教育基盤センター紀要 vol.1, pp.55-80, 長崎国際大学教育基盤センター
- 3) 濱名篤・川嶋天津夫編 (2006): 初年次教育, pp.8-11, 丸善株式会社
- 4) 下湯直樹他 (2017): 初年次教育科目「教養セミナーA」における教育の質保証構築に向けた実践とその課題, 『長崎国際大学教育基盤センター紀要』, vol.1, pp.13-26, 長崎国際大学教育基盤センター
- 5) 乙須翼他 (2018): 初年次教育科目「教養セミナーA」の実践と課題 —学生の実感と教員のプログラム評価に着目して—, 『長崎国際大学教育基盤センター紀要』, vol.2, pp.15-28, 長崎国際大学教育基盤センター
- 6) 井上英也他 (2018): 初年次教育の深化に向けて—ホスピタリティ概論の分析から—, 『長崎国際大学教育基盤センター紀要』, vol.2, pp.27-54, 長崎国際大学教育基盤センター

授業科目(ナンバリング)	ホスピタリティ概論 (AA103)			担当教員	安部直樹・中島憲一郎・木村勝彦 橋本健夫・井上英也・山内美德 神野周太郎・森尾真之・金澤由佳 グイラググイトル・藤井俊輔・小田和人 藤原俊幸・田中啓太郎・藤木司		
展開方法	講義	単位数	2 単位	開講年次・時期	1 年・前期	必修・選択	必修
授業のねらい							アクティブ ラーニング の類型
<p>本学は、「人間尊重」を基本理念に、「ホスピタリティの探求、実現」を教育・研究の基礎とし、ホスピタリティを構成する能力を身につけ活用できることが、学位授与の方針となっている。本講座は、本学でのあらゆる学びの基本となるホスピタリティの意味を理解し、実践的に体現していくことができるようになることをねらいとする。</p>							④⑤⑥ ⑦⑫
ホスピタリティを構成する能力	学生の授業における到達目標				評価手段・方法	評価比率	
専門力	ホスピタリティの具体的なあり方を自らの専攻分野に関連づけて説明することができる。				レポート	25%	
情報収集、分析力	ホスピタリティの基本的な精神とそのさまざまな表現について情報を収集し、分析することができる。				レポート	15%	
コミュニケーション力	ホスピタリティの精神を社会生活の中で実践し円滑な人間関係を築くために、周囲の人達と積極的なコミュニケーションを図ることができる。				授業中の発表や授業ノート	15%	
協働・課題解決力	与えられた課題を自らのものとして捉え、解決を試みる可以尝试。				課題の解決策	15%	
多様性理解力	異分野を専攻する者で構成するグループ活動等において、多くの価値観を認め、協力できる。				授業中の発表や授業ノート	30%	
出席					受験要件		
合計					100%		
評価基準及び評価手段・方法の補足説明							
<p>授業中の参加態度、発表など、授業での積極性、協調性、主体性、などを観察法で評価する。また、講義終了ごとに提出を求める「授業ノート」により理解度を確認する。加えて適宜課されるレポートの内容と併せて、総合的に評価する。授業、レポートにおける質問、コメントなどへのフィードバックは都度おこなう。</p>							
授業の概要							
<p>本授業は、テーマ、内容に応じて、理事長、学長、副学長をはじめとする本学教員および社会で活躍する本学の卒業生ならびに外部講師の講義により、本学の学びの核となる“ホスピタリティ”の多面的な理解を目指す。また、授業内容により全体、学部・学科混成、学科別にクラスを編成し、同学年の多くの学生と学び、討議し、実践する機会を提供する。この授業の標準的な1コマあたりの授業外学修時間は、180分とする。</p>							
教科書・参考書							
<p>教科書：特に指定しない 参考書：適宜指示する 指定図書：「本物の大人論」外山滋比古(著) 海竜社</p>							
授業外における学修及び学生に期待すること							
<ul style="list-style-type: none"> <li>・専攻の異なる他学科の学生および留学生と積極的に交流することで、自分と異なることへの受容性を高め、幅広い視野を養うこと。</li> <li>・集団における自分の役割を認識し、自分自身のホスピタリティに基づく行動が全体に与えるプラスの影響について考える習慣を身につけること。</li> <li>・授業で学んだことを直ちに実践してみること。</li> </ul>							

回	テーマ	授業の内容	予習・復習
1	オリエンテーション	シラバスの説明、担当教員及び事務職員の紹介、班編成、班ごとの自己紹介、授業ノート(ポートフォリオによるレポート)の入力方法の説明などを実施する。	シラバスを読んでおく
2	長崎国際大学が育成する学士像 (中島学長)	大学の役割を説明するとともに、学生一人一人が将来像を描けるように、長崎国際大学が育てる人物像をディプロマ・ポリシーやカリキュラム・ポリシーを活用して具体的に述べる。さらに、安心して学修に励むことができるような体制を、教員や職員が一体となって構築していることを紹介し、主体的な学修への一歩を促す。	(予) ディプロマ・ポリシーを見ておく (復) 授業ノート提出
	ホスピタリティの起源と文化(木村副学長)	世界史および日本史におけるホスピタリティの起源と変遷を理解し、現代社会の課題を明らかにする。	(予) ホスピタリティの意味を調べておく (復) 授業ノート提出
	プレゼンテーションの重要性(外部講師)	限られた時間の中で、情報や主張を自分の言葉で聴衆に伝えることを目的とするプレゼンテーションの重要性について専門家から学ぶ。	(予) プレゼンテーションの意味を調べておく (復) 授業ノート提出
	オープン・キャンパスプロジェクト	理事長講話 (安部理事長)	(予) 九州文化学園のホームページを見ておく (復) 授業ノート提出
		グループワーク ①	
	オープン・キャンパスプロジェクト	生活とホスピタリティ(外部講師)	(予) オープン・キャンパスの体験を振り返っておく (復) プレゼンテーションを完成させる
		グループワーク ②	
		グループワーク ③ 発表	(予) プレゼンテーションの準備 (復) 授業ノート提出
8	事務職員のキャリアとホスピタリティ	本学の事務職員の仕事について理解し、職員の経歴をもとに、仕事とホスピタリティの関係を考察する。	(予) キャリアの意味を調べておく (復) 授業ノート提出
	国際化とホスピタリティ	グローバル化する社会の多様な文化の中におけるコミュニケーションのあり方を考察する。	(予) 他言語を学ぶことの意味を考えておく (復) 授業ノート提出
10	ホスピタリティ・ルーブリックの理解と自己認識	ホスピタリティ・ルーブリックに基づき、「ホスピタリティを構成する5つの能力」について理解し、自己の現状認識をした上で行動目標を設定する。	(予) ポートフォリオにあるホスピタリティ・ルーブリックを調べておく (復) 行動目標の完成
11		各専攻分野に求められるホスピタリティ	
12		学科別の課題とホスピタリティ①	
1		学科別の課題とホスピタリティ②	
1		学科別の課題とホスピタリティ③	
1		学科別のまとめ及びレポート提出	

回	テーマ	授業の内容	予習・復習
1			
2			
8			
10			
11	国際観光学科に求められるホスピタリティ	国際観光学科での学びにおけるホスピタリティの重要性を理解し、特に本学科の学生に求められる多様性理解力について考察する。	(予) 観光の必要性を考えておく。 (復) 授業ノート提出
12	長崎国際大学での学びと社会(グローバルツーリズム)	社会で活躍する国際観光学科の卒業生を招き、大学の学びと仕事の結びつきを共に考える。	(予) 大学生活におけるホスピタリティの意義をまとめておく。 (復) 授業ノート提出
1	長崎国際大学での学びと社会(スポーツツーリズム)	社会で活躍する国際観光学科の卒業生を招き、大学の学びと仕事の結びつきを共に考える。	(予) 大学生活におけるホスピタリティの意義をまとめておく。 (復) 授業ノート提出
1	長崎国際大学での学びと社会(観光マネジメント)	社会で活躍する国際観光学科の卒業生を招き、大学の学びと仕事の結びつきを共に考える。	(予) 大学生活におけるホスピタリティの意義をまとめておく。 (復) 授業ノート提出
1	「ホスピタリティ概論」を受講して	「ホスピタリティ概論」での成長を診断するとともに、授業の改善点を検討し、まとめる。	(予) 授業ノートをまとめておく。 (復) 授業の改善点の完成



回	テーマ	授業の内容	予習・復習
1			
2			
8			
10			
11	社会福祉学科のホスピタリティ	社会福祉の歴史を概観しながら、対人援助及び地域援助に求められる多様性の尊重等の諸原理とホスピタリティとの関係性について学ぶ。(学部長・学科長)	(予) 学部長・学科長に質問したいことを列挙する。 (復) 授業ノート提出。
12	福祉の仕事におけるホスピタリティ①	現場で活躍するソーシャルワーカーの実践事例を踏まえたホスピタリティの考察から、その必要性について理解を深める。(ソーシャルワーカー)	(予) SWに質問したいことを列挙する。 (復) 授業ノート提出。
1	福祉の仕事におけるホスピタリティ②	社会福祉学科卒業生が本学と現場で学んだホスピタリティや専門知識等を社会福祉実践にどう結び付けているかを知り、学修する意味を理解する。(卒業生)	(予) 卒業生に質問したいことを列挙する。 (復) 授業ノート提出。
1	「ホスピタリティ概論」全体の振り返り	これまで学修してきた授業を振り返り、ソーシャルワーカーがホスピタリティをどう受けとめ、研鑽すべきかをグループで検討する。	(予) これまでの授業ノートや配布物を整理する。 (復) 授業ノート提出。
1	「ホスピタリティ」論述	ホスピタリティの意味についてどのように理解し、今後どのように実践的に体現していきたいかを論述する。	(予) 第1回授業内容に対する自分自身の考えをまとめる。

回	テーマ	授業の内容	予習・復習
1			
2			
8			
10			
11	健康栄養学科に求められる ホスピタリティ	「食と医学を基本とした栄養学」を修得し、広く社会に貢献していくために、健康栄養学科での学びにおけるホスピタリティの重要性を理解する。	これまでの授業内容をまとめておく。
12	ホスピタリティと仕事 1	臨床栄養・・・医療分野 ①栄養ケア・マネジメントの実践を通して ②傷病者の栄養計画から具体的なプラン展開を通して ③チーム医療に重要なコミュニケーション力を通して	医師、看護師、薬剤師、管理栄養士のチーム医療について調べておく。
1	ホスピタリティと仕事 2	福祉施設・・・高齢者福祉施設・保育所 ①栄養管理方法の理解を通して ②栄養問題について実践的な提案を通して ③介護保険制度や保育所給食のガイドラインの理解を通して	福祉施設の現状について調べておく。
1	ホスピタリティと仕事	委託給食施設・・・委託会社、派遣会社 ①受託先・派遣先との契約を通して ②多用な業務を通して ③受託先、委託先とのチームワークを通して	委託給食施設について調べておく。
1	「ホスピタリティ概論」を受講して	「ホスピタリティ概論」での成長を診断するとともに、授業の改善点を検討し、まとめる。	(予) 授業ノートをまとめておく。 (復) 授業の改善点の完成

回	テーマ	授業の内容	予習・復習
1			
2			
8			
10			
11	薬学科に求められるホスピタリティ	薬学部学生が卒業時に必要とされる資質、すなわち薬剤師としての基本的資質が 10 項目挙げられている。それらの資質の修得は、患者・生活者本位の視点を醸成する基盤として位置付けられる。本講義は、患者に寄り添う薬剤師としてのホスピタリティについて考えることを狙いとする。	薬剤師としての基本的資質である 10 項目の内容について調べておく。
12	仕事とホスピタリティ	仕事に必要なホスピタリティを本学（病院・薬局、行政等）、外部講師から講演・談話形式で学ぶ	病院・薬局での薬剤師の仕事について調べておく。
1	ホスピタリティのための心理学 1	患者・生活者、他の職種との対話を通じて相手の心理、立場、環境を理解し、信頼関係を構築するために役立つ能力を身につける。 1 自身の行動と他者の行動が、どのような感情・情動で決定するのか体験的に理解する。 2 意思、情報の伝達に必要なコミュニケーションのあり方について学習する。 対人関係に影響を及ぼす心理的要因についてさまざまな場面を疑似体験することで体験的に理解する。 病歴や処方箋から患者の心理状態について推測する力を養いよう。 5. 自分や他者の態度によって影響を受ける自身の心理や他者心理について理解する。(態度)	チーム医療について調べておく。
1	7月17日(水) 10:40 ホスピタリティのための心理学 2	6. 他者にとってバッドニュースを適切な手段により伝えることができる。 7. 自分の考えや感情を相手に不快な思いをさせずに伝えることができる。(技能・態度) 8. 他者の意見を尊重し、協力してよりよい解決法を見出すことができる。(知識・技能・態度) 9. 患者や家族、周囲の人々の心身に及ぼす病気やケアの影響についての予測について適切に説明できる。 10. 患者・家族・生活者の心身の状態や多様な価値観について想像し、配慮できるようになる。(態度)	12 回目・1 回目の内容についてノートにまとめ、自分の意見を述べるできるようにしておく。
1	「ホスピタリティ概論」を受講して	「ホスピタリティ概論」での成長を診断するとともに、授業の改善点を検討し、まとめる。	(予) 授業ノートをまとめておく。 (復) 授業の改善点の完成

ホスピタリティ概論クリッカー質問事項

- 1 この調査の回答は、個人が特定できない形で処理をして、授業改善のためのデータとして活用し、学会等でも公表したいと思います。協力して頂けますか。  
① 協力する ② 協力しない
- 2 所属する学科を教えてください。  
① 国際観光学科 ② 社会福祉学科 ③ 健康栄養学科 ④ 薬学科  
性別を教えてください。  
① 女性 ② 男性  
ご入学、おめでとうございます。さて、本学の学長は何番でしょう？  
① 木村副学長の写真 ② 中島学長の写真 ③ 理事長の写真 ④ 事務局長の写真 ⑤ 橋本の写真  
新入生対象の全学オリエンテーションは、よくわかりましたか？  
① 非常によくわかった ② よくわかった ③ どちらとも言えない ④ 分からなかった ⑤ 全く分からなかった  
新入生対象の学科別オリエンテーションは、よくわかりましたか？  
① 非常によくわかった ② よくわかった ③ どちらとも言えない ④ 分からなかった ⑤ 全く分からなかった  
入学して1週間の本学の総合的な印象はいかがですか？  
① 素晴らしい ② まあまあ ③ どちらとも言えない ④ 今一歩 ⑤ はずれー ⑥ 特別な印象はない
- 8 本学の建物に関する印象は？  
① 素晴らしい ② いいんじゃない ③ どちらとも言えない ④ 何とかして ⑤ 建て直して  
本学の先生方の印象は？  
① 素晴らしい ② いいんじゃない ③ どちらとも言えない ④ 余り良くない ⑤ 良くない ⑥ まだわからない
- 10 本学の事務の皆さんに対する印象は？  
① 素晴らしい ② いいんじゃない ③ どちらとも言えない ④ 余り良くない ⑤ 良くない ⑥ まだわからない
- 11 本学への進学は希望通りですか？  
① 第一希望 ② 第二希望 ③ 第三希望 ④ 希望しなかったけど・・・ ⑤ 希望大学は特になかった
- 12 進学した学科は希望通りですか？  
① 第一希望 ② 第二希望 ③ 第三希望 ④ 希望しなかったけど・・・ ⑤ 希望学科は特になかった
- 1 本学（或いは学科）への進学に最も影響を与えた人（機会）は？  
① 自分自身 ② 保護者及び家族 ③ 高校の先生 ④ 友人 ⑤ オープンキャンパス⑥先輩 ⑦ 部活
- 1 いつ頃本学への進学を決めましたか？  
① 中学時代 ② 高校1年生 ③ 高校2年生 ④ 高校 年生 ⑤ 入学直前
- 1 オープンキャンパスに参加しましたか？  
① 複数回参加した ② 1回参加した ③ 自分ではなく家族が参加した ④ 参加しなかった
- 1 現在の生活は？  
① 家族と一緒に ② 寮生活 ③ アパートで一人暮らし ④ 友人と一緒に ⑤ その他
- 1 通学時間は？  
① 0分以内 ② 1時間くらい ③ 1時間半くらい ④ 2時間くらい ⑤ 2時間以上
- 18 出身は？  
① 長崎県内 ② 佐賀県 ③ 福岡県 ④ 大分県 ⑤ 熊本県 ⑥ 鹿児島県 ⑦ 宮崎県  
⑧ 沖縄県 ⑨ 九州外の都道府県 ⑩ 海外
- 1 バイトは？  
① すでに行っている ② 探している ③ していない ④ するつもりはない ⑤ 考える余裕がない
- 20 体への不安は？  
① 全く不安なし ② 不安なし ③ どちらとも言えない ④ 少し不安 ⑤ 非常に不安
- 21 精神的な不安は？  
① 全く不安なし ② 不安なし ③ どちらとも言えない ④ 少し不安 ⑤ 非常に不安
- 22 現在のくらしは？  
① 全く不安なし ② 不安なし ③ どちらとも言えない ④ 不安 ⑤ 非常に不安

- 2 これからのキャンパスライフへの抱負は？
  - ① 勉強するぞー ②友達作るぞー ③バイトするぞー ④部活頑張るぞー ⑤遊ぶぞー
- 2 授業への抱負は？
  - ① 毎回出席するぞー ②できるだけ出席するぞー ③単位が取れる程度に出席するぞー ④うまく休むぞー ⑤特になし
- 2 先生方への要望は？
  - ① しっかり鍛えて ②優しく教えて ③分かるように教えて ④無視しないで ⑤仲良くして ⑥特に要望なし
- 2 事務職員の方々への要望は？
  - ① 厳しくして ②優しく接して ③分かるように教えて ④無視しないで ⑤特に要望なし
- 2 本授業への要望は？
  - ① 厳しく鍛えて ②優しく教えて ③分かるように教えて ④かまわないで ⑤寝させて
- 28 クラスの皆さんへの要望は？
  - ① 優しく接して ②仲良くして ③無視しないで ④かまわないで ⑤寝させて
- 2 ところで、ホスピタリティとは？
  - ① 優しさ ②親切な心 ③思い遣る心 ④競争しない心 ⑤分からない

授業を通してホスピタリティを理解してください。ご協力、有難うございました。

**ホスピタリティ概論 受講生調査質問用紙**

本調査は、令和元年度前期に実施した「ホスピタリティ概論」の10回目までの授業内容等について、学生の皆様がどのような印象を持たれたか、或いは、授業を受けて感じられた改善点等についてお聞きするものです。頂いた意見等を分析・検討して、来年の授業の改善に役立たせることを目的とした調査になっています。

回答状況は、期末の成績には全く影響しません。また、分析結果は論文等で報告しますが、個人が確定されることはありません。安心してお答えください。

なお、質問項目への回答をもって調査への同意を得られたことといたします。調査にご協力いただけない方は、白紙で提出してください。

まず、学生番号欄を塗りつぶしてください。回答は、1 全くそう思わない～ 非常にそう思う、のいずれかについてマークシートの番号を塗りつぶす形をお願いします。

所属	①国際観光学科	②社会福祉学科	③健康栄養学科		④薬学科		
	質問項目						
			全くそう思わない	そう思わない	どちらともいえない	そう思う	非常にそう思う
1	理事長や学長の講義で、本学がホスピタリティの育成を重視している理由が分かった。		1	2			
2	理事長や学長の講義は、新鮮に聞くことができた。		1	2			
	ホスピタリティの起源と文化の講義は、興味深く聞くことができた。		1	2			
	ホスピタリティの起源と文化の講義で、その歴史や意味が分かった。		1	2			
	プレゼンテーションについての講義は、楽しく聞くことができた。		1	2			
	プレゼンテーションの講義で、その意義や方法が分かった。		1	2			
	オープンキャンパスへの提案を考える授業では、自分の意見を言えた。		1	2			
8	オープンキャンパスへの提案のような具体的な活動ができる授業は、有意義である。		1	2			
	オープンキャンパスへの提案の授業は、楽しかった。		1	2			
10	教員や事務の方々による仕事に生かすホスピタリティの話は、興味深く聞くことができた。		1	2			
11	教員や事務の方々による仕事に生かすホスピタリティの話は、役に立つと思う。		1	2			
12	留学生や国際交流センター職員の方々のホスピタリティの講義は、新鮮に聞くことができた。		1	2			
1	留学生や国際交流センターの職員の方々のホスピタリティの講義は、有意義だった。		1	2			
1	ホスピタリティ・ループリックによる分析の授業は、興味深く受けることができた。		1	2			
15	ホスピタリティの自己診断は、役に立つと思う。		1	2			

1	この授業で、他学科の人とおしゃべりする機会を持つことができた。	1	2			
1	この授業で他学科の人の意見を聞くことができて有意義だった。	1	2			
18	この授業で、教職員や（学生スタッフ）の方がお世話してくれたのは良かった。	1	2			
1	（学生スタッフ）の方の支援や指示は、適切だった。	1	2			
20	この授業の受講生数は適切だった。	1	2			
21	この授業では自分で考える時間を持つことができた。	1	2			
22	自分としては、この授業に積極的に参加した。	1	2			
2	ホスピタリティを理解するうえで、この授業は今までのところ合格点を与えることができる。	1	2			
2	「ホスピタリティ概論」を受講しての感想を書いてください。	※マークシート2の自由記述欄へ記入してください。				
2	「ホスピタリティ概論」の中で感じた改善点を書いてください。	※マークシート2の自由記述欄へ記入してください。				

有難うございました。